



2018年7月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2018年7月  
第 115号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 時の流れが速いこの頃

### 目 次

漢点字の散歩 (52) (岡田健嗣) .....	1
点字から識字までの距離 (108) (山内 薫) .....	7
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	14
漢文のページ .....	19
ご報告とご案内 .....	22
編集後記 (木下和久) .....	23

## 漢点字の散歩(五十二)

岡田 健嗣

カナ文字は仮名文字(4)



本誌何号か前から拙稿を書き始めましたが、その折りに、一つの思いが私の念頭を占めていました。いや思えば、拙稿を書き始めたころというのではなく、もつとずつと以前、思い起こせば、漢点字を学ぼうとしていたころにまで遡るのかもしれない。その思いとはどういうものか、曰く言い難いものではありませんが、ある意味で、私のルサンティマンの原点の一つのように思われるものに違いありません。今回は、このことについて述べさせていただくことから入らせていただきます。

もっともここに「ルサンティマン」と書きました。が、まずはこの「ルサンティマン」とは何かから考えなければいけません。

いつものように「広辞苑」を引いてみますと、

ルサンチマン 【Resentment フランス】／ 怨恨  
・憎悪・嫉妬などの感情が反復され内攻して心に積っている状態。

とありました。

いやはやこのごく短い文の中に、何とおどろおどろしい語句が並んだものでしょうか！恨み・憎しみ・妬み・嫉みなどが合い重なって、屈託し内攻し、積もりに積もって心を苛んでいる状態と言います。このように見て来ますと、こんなことを書き始めたことに、正直、しまったと思わずにはおられません。しかし、ここから始めませんと、この後に続かないという思いもありますので、お許しいただきたいと存じます。

この「ルサンティマン」は、意識するかしないかは別として、大なり小なり誰しもが抱えている心の状態であって、また大いなる負担になっているものに違いありません。「怨恨・憎悪・嫉妬」という語句が指すところがその中身だと言われれば、誰しもが抱く感情や心情と言うことができるからです。そしてこれらの感情や心情が積み重なったのが、この「ルサンティマ

ン」なのです。つまりこれらの感情や心情は、一過性  
に通り返ぎ、消滅するものではなく、時とともに積み  
上がり増大して行くものだと言っていることにもなり  
ます。してみますとこの「ルサンティマン」こそが、  
万人の悩みの元と言つてよいとさえ思われて来ます。  
一人の人が抱えている「ルサンティマン」、大きさや  
重さや性質の異なった他の人の「ルサンティマン」、  
これらがすれ違い、絡み合い、衝突し合うという光景  
は、できれば想像したくはありませんが、実際は、世  
間の付き合いの中、家庭・職場・その他の付き合いの  
中で、日常的に繰り返されていくに違いありません。  
そのようにして形成されたと思われる私の「ルサンテ  
イマン」の一部分に、私自身が気付いたところからお  
話は始まります。

私は幼年期、強度の弱視であったために、盲学校で  
初等・中等・高等教育を受けて育ちました。そして高  
等教育の課程に入るころ、失明し、全盲となりました。  
その盲学校では漢字の教育は一つとして施されま  
せんでしたので、漢字という文字の存在は知ってい  
ても、漢字そのものを知る機会を得ることはありません

でした。

当時の盲学校の高等教育の課程は、全国的に「理療  
科」と呼ばれる職業教育の課程が一般で、ほんの僅か  
だけに、「普通科」と呼ばれる一般の高等学校に相当  
すると言われる課程を設けている学校がありました。  
私はその高等部の「理療科」の課程に進んで、口を糊  
するべき職業に必要な資格を得て現在に至っております。

盲学校の先生方の構成は、普通の授業を担当される  
先生方は、一般の大学で教員の普通免許を取得された  
方々です。普通の教員として就職されて、盲学校に配  
属された方々です。理療科の授業を担当される先生  
は、筑波大付属盲学校の、理療科教員養成課程を卒業  
して、各地方の盲学校に赴任なさった方々です。私の  
通いました横浜の盲学校では、理療科の先生の多くは  
全盲でいらつしやうて、若干名の弱視の先生がおられ  
ました。その弱視の先生方は、恐らく独力で、漢字を  
学習なさったご様子で、目を近づけたりルーペを使用  
したりして、普通の文字の図書をお読みでした。全盲  
の先生方は、カナ点字の図書、あるいはそのころ盛ん

に製作され始めた音訳図書に頼って読書をしておられました。そのような先生方は、盲学校のご出身で、私同様漢字の教育を受ける機会を得ないまま、また盲学校に就職なさったという経歴の方々です。

授業というのは誠に面白いもので、カリキュラムはどの学校でも同様に設定されているはずですが、生徒の側から申しますと、教壇に立たれる方によって、面白くなったりつまらなくなったり、興味深くなったりさほど興味を引かれなくなったりがあります。恐らく先生方にも同様のことがあるらしく、力の入るクラスがあれば、通り一遍で終えてしまうクラスがあつたようです。そんな中、授業に力が入らないためか、余談とともに時折こんなことをおっしゃる全盲の先生がおられました。「ご先祖様を恨むよ！何で日本語をカナだけで書けるようにしてくれなかったのか！もしカナだけで日本語が書かれていたなら、こんな苦労や情けない思いをしなくてもよかつたはずだ！」

こういう言葉を幾度聞いたか分かりません。お一人だけがおっしゃっておられるのではありません。全盲の先生は、これに類したことを、ほとんどの

方がおっしゃっておられました。ただしそれは、授業中か放課後に他の先生がおられない時に限られておりましたが……。

盲学校を卒業してから、私は同様のことを別の場所で耳にすることになりました。それは視覚障害者が集う席でした。多くの視覚障害者が一つの場に集まつて、そこである高名な視覚障害者の方、一般には「識者」と呼ばれる、お名前の下に先生と呼ばれている方のお話を聴く席のことでした。私はごく若いころでしたので、その他大勢の一人という扱いで、誠に気軽に出席したのですが、その先生も、聴取者が視覚障害者ばかりだったからか、軽いタッチで「ご先祖様が恨めしい……」と、盲学校の全盲の先生がおっしゃつたのと同様のことをおっしゃいました。そんなことがあつた後にも、別の視覚障害者の識者の方も、同様のことを同様のタッチでおっしゃっておられる場に同席することがありました。なるほどこれが視覚障害者の共通の理解だったのだ、と私はそれにやっと気付いたのでした。

もっともそのような言葉を聞くことになった盲学校

でも、また卒業後の視覚障害者の集いでも、私も同様の気持ちでいたように思います。全てがカナ文字で表されていれば、日本語の文章も、何と分かり易い文章だったろうに、視覚障害者も、一般の晴眼者とともに、社会で活動し易かっただろうに、そう私も思っていたのでした。

右に述べた見解、見解と言えるものかどうか分かりませんが、「日本語がカナ文字だけで表されていたなら：：」という見解、冷静に落ち着いて考えて見れば、指で触れるだけで泡のように散ってしまうような、誠に頼りないものであることは、容易に・瞬時に分かるはずです。ところがそれが分からない、みんなで渡れば赤信号も青信号に見えてしまうような、心がそんな状態に置かれてしまったようでした。

わが国の視覚障害者は、〈漢点字〉が世に問われるまで、漢字の世界を全く知ることができませんでした。漢字の世界を知るには、まず漢字を学ぶ必要があります。しかしそれだけではその世界の入り口に立つことができたに過ぎません。まだその世界に踏み入ったわけではありません。正にそこからが正念場で、如

何に沢山の、よい本を読むかというところが問われま

す。  
視覚障害者がそれを果たそうとしますと、視覚に訴える文字の代わりに、触覚に訴える文字が必要となります。それが〈点字〉です。わが国の視覚障害者がわが国の文字体系を習得し、書物を読もうとする場合、その触覚に訴える〈点字〉の漢字体系がなければなりません。そしてその漢字体系で表された書物がなければなりません。その漢字体系の〈点字〉が、他ならぬ〈漢点字〉です。その〈漢点字〉が世に問われたのは一九六九年だったと言われます。来年でちょうど五十年を迎えます。しかし残念ながら、五十年の年月が流れたと言っても、〈漢点字〉は、普及していると言には、ほど遠い状態と言わざるを得ません。

もう一度右の先生方の言われることを考えてみたいと思います。

漢字文化圏に属しているわが国は、望むと望まぬに関わらず、漢字という文字なしには、文章を書き表し、文章を読むことは叶いませんでした。そのために私たちの大先輩は、何十代にも渡って漢字を受け入

れ、漢字を研究し、漢字をわが国の言葉を表すための文字に育て、日本語の成熟に努力を重ねて来られました。

このように言えば右の先生方は、左のように言われるでしょう。曰く「日本がヨーロッパや中東にあつたら、漢字を使わずに済んだらうに！」。確かに欧州の文字、ユダヤやアラビア・ペルシアでは漢字の使用はありません。その限りではもしわが国が地理的に今の位置になかったならば、漢字から解放されることは確かだったでしょう。しかしその代わりにその文字は、音を表す音素文字であつて、音は表しますが意味は表さないという文字となります。現在でも欧米の言語論は、音と意味がどのように繋がるかというところにその中心があつて、漢字のように意味を表す文字はその対象とはなり得ずにおります。漢字文化圏の文字は、文字がそのまま意味を表します。欧米の言語論は、そのようなことは考慮のうちに入れていないように見えます。

あり得ないことをあり得るように言うのは誠にフェアではありませんし、百歩譲つてのこととしてそうい

う状態を想定することとして、もしわが国が欧州やアラビアの近くにあると仮定してみますと、音素文字をその表記用の文字として採用することになります。そうしますと音だけで表現しなければならぬという、欧米やアラビアの言語に見られるような、意味は意味、発音は発音、文字はその発音を表す記号という位置に置かれることとなります。「カナ文字だけで表すことのできる日本語」とは、結局そういう言語にならざるを得ないということになるように思われます。音だけを表す文字で日本語を表そうとしますと、言語全てを音の変化であらわそうというバイアスが働いて、欧米の言語のように、発音も複雑になりましたし、単語の数や語彙やその表現法も格段に複雑化して、さらに増加することになるでしょう。現在を起点としてそれを考えますと、ほとんど別の言語にならざるを得ない、大きな変化に見舞われるものと考えられます。またあり得ないことですが、二千年前に遡つて、歴史をやり直して、音素文字、あるいは音節文字で日本語を表す状況を設定して、二千年後の現在を想定したとしますと、恐らく現在の日本語とは全く違った、似て

も似つかない、外国語と言つてよいような言語が使用されているように想像されます。

日本語を漢字から解放するという、右の先生方のおっしゃることを考えますと、以上のようなところに逢着します。しかもこのことは飽くまで無理を重ねた想像のもとに言えることで、実際にはあり得ることではありません。が、一つだけ考えられることがあります。

同じ漢字文化圏であるベトナムでは、フランスの統治の間に、漢字での表記法を失ってしまったとのことです。朝鮮半島でも、日清戦争以後の日本の統治の時代に、日本語の流入によつて、土地の言葉が大幅に損なわれたと言われます。わが国でも、そのことは他人事ではありません。

もう一つ、「仮名文字運動」、「羅馬字運動」という運動があるようです。日本語をカナ文字やローマ字で表記しようという運動と言われます。これを実践しておられるとおっしゃる方々のおられることは知られていますが、どのように実践されておられるかを、私どもは知ることができません。またこのような運動の

実践者と言われる方々の中に、先天の視覚障害者のように、漢字の知識を持たない方がおられるか、この点も知ることができません。これまでのこのような運動の推進に当たつておられた方々は、その多くがいわゆる知識人の方々です。そうしてみますと、一般の大衆に比べて、漢字の知識は豊富な上に豊富にお持ちですし、文章の能力も一般より格段に優れておられるに違いありません。そのような方々がカナ文字の表記、ローマ字の表記を推奨なさるには、そこには相當の意義を感じておられることと存じますが、そのような中に、漢字の知識を持たない者が含まれるのかということ、私どもにはその辺りを知らなければならぬのではないのでしょうか？

日本列島に人が住むようになって、長い年月を経ているうちに、大陸では文明が芽生え、国家が形成されます。列島にはかなり以前から人々が住んでいて、漁猟や採集で生活を営んでいました。その後期には、米穀の生産も始まりました（縄文時代）。

紀元前十世紀ころ、大陸から列島に向けて人々が渡つて来ました。先住の人々と住み分けたり混交したり

しながら、列島を北上しました。米穀の生産に勤しむ人々でした。水田を開発し耕地を広めて、そのようにして米穀の生産がわが国の経済の中心となつて行ききました。彼らは米穀の生産の技術者であるばかりでなく、文字という、大陸でも最新の文化をも携えていました（弥生時代）。

しかし現代から思えば誠に不思議なことがあります。彼らが持ち込んだ文字である（漢字）は、明らかに古代の中国語に対応した文字だったはずで、そして大陸から渡つて来た人々も、その大半が中国系だったに違いありません。ところが現在私たちが使用している日本語と呼ばれる言語は、文法も発音も、中国語とはその起源を異にしたものと言われます。日本語の起源がどこにあるのか、現在も分明ではありませんが、いわゆる「孤立語」である中国語に対して、日本語は「膠着語」と呼ばれる構造であると言われます。そのような相違点がありながら、技術的にも文化的にも圧倒的に優位にあつたはずの大陸渡来の人々の言語が、何時しか原日本語とも呼ばれる言語に回収されて

しまいました。何時しかと書きましたが、かなりの初期、遅くとも紀元の初頭ころには日本語と中国語の相違が人々に意識されて、政治・行政・外交の言語としては中国語を公用語と位置づけつつも、日常語としては、日本語を使うことが一般になつて行つたのではなからうかと思われます。古代の中国語を使用していた人々も、公的文書以外は、日本語を使用するようになったという事です。「記紀歌謡」がどの程度時代を遡れるものか分かりませんが、歌謡として残っているものは、口伝が文字に記された八世紀初頭からは、恐らく数世紀ほど遡ることができるとすれば、歌謡や日常語は、列島に生活する人々の言語として、日本語が通用していた証であろうことが伺われます。

このように、文字が使用されたのは公用語としての中国語だけに限られた時期が長く続き、八世紀に入つて、「原万葉集」とも呼ばれる『人麻呂歌集』の登場と『古事記』の編纂によつて、やつと日本語を文字で表すという試みが試みられることになつたのでした。

本会の活動を通して、「万葉集」を漢点字で読むこ

とが、私の目標の一つだと、以前記しました。勿論その目的の一つに、「万葉集」を「鑑賞」するということがあります。残念ながらこれは私にとつて極めて敷居の高いものを感じますが、弛まぬよう頑張つて見たいと思つております。もう一つ、日本語の表記がどのようにして現在のようない「漢字仮名交じり」の形に収斂されたのか、そのプロセスを追つてみたいという思いが強くありました。

そこで今回の最後に、左の歌謡を考えてみたいと思います。

夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻碁徹爾 夜幣  
賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁

この歌を現代のカナ書きにしてみますと、

やくもたつ いづもやへがき つまごみに やへ  
がきつくる そのやへがきを

となります。よく知られている「記紀歌謡」の素戔鳴

尊（記紀では、「須佐之男命」と書かれているようです。）が、出雲に国を立てた時に歌つた歌とされています。

見事な音仮名だけで表された歌です。その意味では、そっくり現代のカナ文字に置き換えても歌の味わいを損ねることにはならない訳ですが、しかし一般にはこのようなカナ文字だけの表記で読むことはありません。

それならどのように読むか、

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る  
その八重垣を

です。現代語に訳しますと、「八雲立つ」は「八つの雲が立つ」、瑞雲のことでしょうか？枕詞となつて次の「出雲」を導きます。「出雲」は今の島根県の旧国名、古代の国家の所在地です。素戔鳴尊が建国した国と言われます。「出雲八重垣」は、その出雲の国に八重の垣を築いて、「妻籠みに」、妻を迎えて国を営もう。「八重垣作る その八重垣を」、八重に垣を築い

て、その八重の垣を巡らした中で営もう。こんな感じでしょうか！

原文は音仮名で表されたこの歌謡、現在の私たちに音仮名だけでは読めない歌謡（このように漢字仮名交じり文に直した歌がよく知られている歌であることはここでは問わず）、この歌の意味を読むには、このように漢字仮名交じりに訳さないとその意味を理解することができません。いや、また別の意味に理解することもできるようです。

「やくもたつ」↓「八蜘蛛断つ」、先住民であつて、服わぬ民である「つちぐも」、その八つの部族（八岐大蛇を想起させます。）を平らげて、妻を迎えて出雲の国に国を立てよう。「やえがき」↓「やえ書き」、掟書きを作つて、それに従つて国を営もう！

こういう理解もあると聞きます。カナ文字だけの歌として読もうとしますと、その理解には限界があることが分かります。漢字をどのように当てるか、それによつてその意味が大きく変わつて来る、後代の誰かが漢字を当てて下さったからこそ、その意味を確定して読むことができるようになったのです。

もう一つ、「八雲立」つ、「妻籠」みに、「八重垣作」る、「その」八重垣」を「」。

「」で挟んで記した文字は、カナ文字でなければなりません。「そ」もカナ文字で書かれておりますので、これも挟んでおきましたが、このような歌の場合、「こ・そ・あ・ど」の指示代名詞は、漢字が用いられることが多いようです。

このように「漢字仮名交じり」とは、日本語の表記法として最も収斂された表記法であることが分かります。日本語の表記では、カナで書くべきところが分かります。カナ文字であるべきところに漢字を当てることはできません。カナ文字とは、そのような働きをする文字なのです。

以上、今回は「ルサンティマン」からお話を始めましたが、全ての「ルサンティマン」を克服するなどということは誠に身の程知らずということに違いありませんが、自らに気付いた「ルサンティマン」は、克服すべく努力したいものと、私は考えております。

## 点字から識字までの距離（一〇八）

野馬追文庫（南相馬への支援）（二六）

山内 薫

今回は攬上さんが所属し、当初から野馬追文庫の活動に様々な協力を頂いているジネット（「お茶の水女子大学児童学科・発達臨床学講座・発達臨床心理学講座同窓会」）のMさんから原稿をお寄せ頂きました。Mさんは野馬追文庫の発送作業を毎月お手伝いして下さっています。原稿の中にも記されていますが、当初から精力的に発送作業を支援して下さいましたZさんが二〇一五年一月に急逝され、Mさんがその後を引き継いで現在まで協力して下さいます。

私が野馬追文庫発送のお手伝いを継続的にするようになってから三年半近くなりました。その間に感じたことを書くようにのご依頼でしたが、大したことをして来なかった私には書けるほどのことがなく、これを読まれる皆様には申し訳なく思っています。

二〇一一年三月一日午後、東北地方太平洋沖地震が起きた時、私は住んでいるマンションの部屋の排水管清掃が終わりホッとしたところでした（たまたま家にいたので、帰宅困難者にならずにすみました）。

「えっ?! いよいよ二度目の関東大震災?」と思いつつ玄関のドアを少し開けてうずくまって様子を見、その後今の地震の震度は? とつけたテレビに映ったのは仙台空港が津波に呑みこまれていく光景でした。各地で地震や津波による建物の倒壊、それに続いて起こった福島第一原子力発電所の爆発による放射性物質の拡散。東日本大震災の被害の大きさの情報は日増しに増え、今まで経験したことのない大惨事が起こっていること、多くの犠牲者の方がいらつしやること、それらのニュースを耳にする毎日の中で、「生かされた」私たちに出来ることは何か……。その思いの一つとして「被災した子どもたちに絵本を送って元気になってもらいたい」と寄附金を集めたものの、その活かし方をなかなか見つけられずに模索していた時に出会ったのが「子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」の一つとして活動している攬上さんの「野馬追文庫」のお

話でした。

まず野馬追文庫へ私たちが集めた寄附金の一部を寄付することから関わりが始まりました。寄付は毎年わずかずですがまだ続いています。私たちのグループで攬上さんたちの活動に最初にお金だけではなく人的お手伝いを、と手を挙げられたのは当時八〇才に近い年齢の先輩Zさんでした。二〇一二年一二月からお手伝いは始まりましたが、当時は三〇数か所の仮設住宅に絵本を届けるために、梱包にかなりの労力が必要でした。それを攬上さんがお一人でなさっていると知って、お手伝いをしないわけにはいかない、と始められたのでした。

南相馬のことを知ってもらうためにもいろいろな人に関わってもらいたいというのがZさんの方針で、私のお手伝いの順番は中々めぐって来ず出番は一年に一回ほどしかありませんでした。その彼女が二〇一五年一月に急逝され、代役のお手伝い係を私が引き継ぐことになりました。毎月一日に間に合うように絵本を発送する。そのことの意味をあまり深く考えることなく、ただお手伝いする人が必要だからと引き継いだの

でした。そして毎月の発送のお手伝いが始まりました。私の場合は攬上さんや先輩のように毎月必ずではなく、時々他の仲間にも代わってもらって協力し合いながらですが。

南相馬の今を考えつつ、どのような絵本を届けるのがいいのかを真剣に考えて選書してくださる方々がいて、その本を発送してくださる方がいて、それを梱包し発送する方がいて（そのお手伝いを私もすることができて）、届けてくれる配送の方がいて、送られてきた絵本などを南相馬市のそれぞれの場所で受け取って子どもたちに届けてくださる方たちがいて、子どもたちやその周りの方々が読んで選書者たちの思いを受け止めてくださり、その気持ちをまた返してくださる。絵本に書かれていることが子どもたちやその周りの大人たちの生きる糧になっているのはもちろんのこと、関わっている人たちの「思い」が行ったり来たりしている、心のキャッチボールができていることが本当に生きる心の糧になっているのだな、と実感できるようになったのはしばらく後になってからの事でした。

二〇一三年八月に、南相馬市保健所の〇さんに東京

までお越しいただき震災当時のお話を伺う機会を得ました。二〇一五年二月には攪上さんに企画していただいて、数名で南相馬に伺い、南相馬市社会福祉協議会を通じて友伸グラウンドの仮設住宅にお邪魔し、そこへ避難していらしていた小高地区の皆さん（主に高齢の方）とお話する機会を得ました。「じゅにあサポートかのかん」や「ちゅーりっぷ文庫」にお伺いして担当者の方と直接お話することもできました。南相馬市保健所の〇さんと再会しお話を伺うこともできました。そしてあの震災の日から時間が止まってしまったような小高地区をタクシーの運転手さんに案内してもらいました。「テレビの映像ではわからない魚の腐った臭いで当時は大変だった」という運転手さんの言葉に、私たちの想像を絶する光景がそこに広がっていたことがよりはっきりとわかりました。

野馬追文庫発送の時に、季節の挨拶程度ですが送付案内のハガキを同封しています。届け先の方の顔を思い浮かべながら書いています。直接お目にかかったことがある（相手の方はその他大勢の中の一人でしかなかった私の記憶はないでしょうが、私にとってはあなたの方に書いています）、というのは大切なことです。直

接お目にかかっていない方々も、送付後に返信してくださるメールや、喜んでいらっしゃるお子さんたちの写真を送ってくださいることによって、ハガキの向こうにいる方々がとても身近に感じられます。お手伝いを始めたころ、書くのが苦手な私は、「えー、お手紙？」とちょっと苦痛でした。でも、これはとつてもいいシステムです（特に私ではなくもつと上手に書ける方が書く）。これを考えた人はなんて素晴らしい！と最近思うようになりました。ただ物を梱包して送るだけでは繋がらない、ただの手伝いだった私の気持ちだが、何かを書くという行為によって、相手を考えることで、繋がって行くのです。毎月少しずつ継続して同じ相手に送る、このこと自体がとても素晴らしいやり方です。

私はさいたま市にある影絵グループに所属しています。その指導者も、震災後一〇年間は被災した方々を元気づけるために毎年公演をしよう、と考えていて二〇一二年二月から昨年一〇月までに合わせて六回、岩手や福島で公演を行いました。二〇一六年の公演では懐かしい南相馬市を通過して相馬市へ行き、その後南下していわき市が最終公演地でしたが、途中の公演先の広野町へ向かった時は放射線量の多い、道路以外は

立入禁止の地区も通りました。そこは時間の止まった町というよりは見捨てられ草に覆い尽くされていて、茨に覆われた眠り姫のお城の外側のような感じでした。でも子どもたちはどこにいても元氣。笑顔いっぱい迎えてくれ、歌の影絵に合わせて歌ってくれます。来てよかった、と思わせてくれます。直接相手の顔を見、声を聞くことのできるこの活動はとても楽しい時間で、これからも毎年続けていきたいと思っています。ただ、野馬追文庫発送のお手伝いとは違って、二度公演に伺った所も数か所ありますけれど、そのかわり方は一過性で、そこから先に進んで心のキャッチボールという訳には行きません。

話がちよつとずれましたが、同じ相手に継続して関わっていくことの大切さをこの野馬追文庫で教えてもらったように思います。この3年半にいろいろな絵本に出会ってきました。絵本がどんなに人の生き方に関わっていくのか、読んだその時に楽しむだけでなく、何かの折に付け、かつての記憶の中のお話がその人を勇気づけてくれるということを、選書をしてくださっている司書さんたちのお話から学ぶことができまし

た。攪上さんが色々とお話してくださるので、送付先の方々は今どんな様子なのかそれぞれの思いに気持ちを向けることができます。毎月一回ほんの少しの時間だけのお手伝いですが、その積み重ねは私にいろいろなことを教えてくれました。これからもこれ続けることによってまた多くのことを学び感じていけることと思います。

東日本大震災の余震はまだ続き、二〇一六年四月に熊本大分でも大きな地震災害があり、つい最近の六月一日には大阪で大きな地震が起きました。何かある度に被災された方々は過去の記憶と向き合わさせられています。絵本送付先の方から、三月一日は福島にいないようにしています、というメールをいただきました。関東大震災からすでに九五年。いつ東京に大災害が起きてもおかしくありませんが、今はまだ私は「生かされて」います。生かされている以上、傷ついた人に寄り添う一人でありたいと思います。小さなことでも続けることによって何かが見えてくる、そのことを教えてくれた野馬追文庫に感謝しています。

# 「東京漢点字羽化の会」第148～150回 例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2018年4月の例会(第148回) 4月11日(水)

13:30～15:30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

新年度を迎えてボランティア保険の切り替えの手続きをしていただいた。

朝日の記事は、今月から筆者も内容も変わったが、大筋では「木簡」についてで、やはり「歴史的なこと」に焦点を当てているようなので、これまでと同じようにグループ分けをして、ファイル名は、朝日「木簡」として入力していただくことにし、暫く様子を見ながら進めてみましょうと、グループ分けをしていただいた。

第一回目の、朝日「木簡の古都学」を読ませていただいた木村は先が楽しみになった。皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

5月16日の横浜での印刷をIさん、Sさん、Mさんのお3方がいらしてください。

いつもありがとうございます。

東京漢点字羽化の会の7月の活動予定を決めた。岡田さんが入力の記事についてお話しし、少し込み入ったところもお話なされた。

また、『萬葉集釋注』を取り上げて実際の歌に合うような読み方の工夫が大事であると具体的に説明してくださいました。

2018年5月の例会(第149回) 5月9日(水)

13:30～15:30、ヒューマンプラザ7階第1会議室

朝日「木簡」の入力のグループ分けをした。5月16日、印刷に行ってくださいとお3人の皆様よろしくお願ひいたします。

8月の活動予定を決めた。ただ、8月の学習会の日については、もう少し検討することにした。

『古語辞典』は「タ、チ、ツ」まで纏められ、岡田さんが漢点字で読みやすいようにファイルを纏めてくださる。

4月から、朝日『Be on Saturday』は、「朝日 木簡の古都学」に替わったので、入力形式、レイアウトなど、丁寧な岡田さんが説明した。

2018年6月の例会(第150回)6月13日(水)

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室  
何時ものように朝日の記事「木簡の古都学」入力のグループ分けを決めた。

7月の横浜での印刷に何時もの方が行って下さることも確認させていただいた。いつも本当にありがとうございます。

7月の例会には、横浜から吉田様がお出で下さり、『萬葉集釋注』第8巻の校正について説明して下さいますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

昨年亡くなられた方が担当して下さった「古語辞典」の分担か所が漏れずに、杉田さんの所に集められているか、確認していただきたいと、これも岡田さんをお願いした。

岡田さんから、東京漢点字羽化の会で、古語辞典が全部終えてから、白川静著『後期万葉論』の入力をしていたいただきたい、とも言われた。

岡田さんが、萬葉集の入力状況をお話くださり、東京でも『古語辞典』の進捗状況を確認し、その先の大切な参考資料についても入力をお願いしたい旨皆様に

計られた。早速具体的にどのようなようにしたらよいか大筋で話し合ってください。本文も大変であったと思うが、この参考資料は、文字が細かいとのこと、入力するには、また細かい打ち合わせが必要であるという。このこともどうぞよろしくお願いいたします。

9月の活動予定を決めた。

\* 予告

2018年7月の例会(第151回)7月11日(水)

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年7月の学習会(第122回)7月28日(土)

17・30～19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

\* 8月の例会を8日に、18日を学習会として予定したが、あいにく8日はお部屋を予約することができなかったので、例会を8月22日に切り替えましたので、8月は学習会と例会の順序が何時もととは異なりますのでご注意ください。

2018年8月の学習会(第123回)8月18日(土)

17・30～19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

2018年8月の例会(第152回)8月22日(水)

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年9月の例会(第153回)9月12日(水)

13・30～15・30 ヒューマンプラザ7階第1会議室

2018年9月の学習会(第124回)9月29日(土)

17・30～19・30 ヒューマンプラザ7階第2会議室

## わたくしごと

### 積み重ねられたわたしへの形見分け(上)

もう十数年以上前のことである。

わたしの側に漢点字点訳をしてくださる方がいらした。直接漢点字を打てるタイプライターも用意し、早い段階で、恐らく漢点字表も見ずに点訳していらしたと思う。

わたしはその方が書いてくださったものを読ませていただいていた。

校正などとはおこがましく、わたしの方が、どんな漢字を使うのか、はるかに多くを教えていただいていた。

もし校正というのであれば、単純なミスタッチを見つけて、「あれ?ここでこの文字を使うのかな?」と確認する程度であった。

それはとても楽しい日々、充実した日々であった。ある時、わたしは思い切って、ある方の追悼文集の

漢点字訳をお願いした。

全くの個人的なものなので、その方に相談すると、「長いのですか?」と聞かれた。

「いいえ、薄い小冊子です。が、わたしは是非これを全部漢点字で読みたいのです」

「ではそれを今度会うとき持って来てください。それから決めましょう」

と言われた。

どきどきしながら次にお会いするとき持つて行き、見ていただくと、ありがたいことに、

「いつまでと約束はできないけれど、やりましょう」と言ってくくださったので、ホッと安心した。

ところが、これまでの経験では、そろそろ「少し書きましたのでここまで見てください」と、校正もどきをお持ちになる頃合いなのに、なぜかお声がかからない。「ああ、厄介なのかなあ。それともお気に召さない内容なのかなあ」などと心配になった。むろんこういうことはこちらからお聞きするわけにはいかない。何と言ってもお忙しい方なのでひたすら待つことにした。

この追悼文集をお願いしたのはクリスマス直前であ

ったと思う。じっと待つしかない。

そうして、3月の末か、4月のはじめであったか、  
「できたわよ。校正もしてもらわないで、一気に夢中  
で仕上げました。とにかく読んでみてください。直す  
ところがあつたら遠慮無く言ってください」

と言つて、両面120ページの、丁度一冊の点字本、  
墨字の表紙もついで、製本された完成品を手渡され  
た。

「内容は知っていますのですか？」と聞かれたので、  
「ごく一部しか聞いていません」

「そう、読みでがありますよ。漢点訳させてください  
てありがとうございます」と丁重におっしゃった。  
そして小声で、つぶやくように「罪の連鎖」とおっし  
やつたが、わたしにはまだその意味が分からなかつ  
た。けれどもこの方からこんな言葉が発せられたの  
で、「罪の連鎖、ですか？」とわたしは口走つたこと  
を覚えている。

漢点訳をお願いしたのは、劇作家、高戸要（たかど  
かなめ）さんの追悼文集である。

家へ持ち帰つたわたしは緊張しながら扉から読み始

めた。

濃い内容なので、少し読んでは戻り、進めては立ち  
止まって考えた。既に亡くなられたこの方と私との関  
わり方、実際にお会いしたのは、一日のうちの一つた  
三時間！でもこの方の周囲への広がり大きさ、その  
他を追って行くのは大変であつた。

この文集の編集者は、高戸さんが、ある集会で話さ  
れた『ソウルで考えさせられたこと』と題する内容を、  
この文集の冒頭に記載している。

その中で高戸さんは、

「今年（2001年）3月1日、わたしはソウルに  
いました。」とある。

実は、わたしも3人の友と一緒に、高戸さんと別行  
動ではあるけれど、この方の目的に合わせて同じ地を  
踏んでいた。

高戸さんは、日本の劇団と一緒に、ソウルで「韓国  
独立運動記念日」に合わせて、日本が韓国の皆様に犯  
した大きな罪を謝罪する意味を込めた芝居を、韓国国  
立劇場で上演するために、劇団員20人と共にソウルへ  
いらしたのである。

1910年、日本は、韓国（北朝鮮も含む）を併合した年である。

韓国の皆様に、母国語を使つてはならない。名前も、日本名に変えねばならない。などなど人間としての尊厳を奪う政策を取つた。

当然、韓国の人たちの怒りは激しく、1919年3月1日、ソウルにあるパゴダ公園で「独立宣言文」を読み上げ、大勢の人たちが「マンセ！マンセ！（万歳！万歳！）」と言いながら街頭に繰り出した。

日本の官憲、軍隊、警察はただちにこれを弾圧したが、これを皮切りに、この運動は韓国各地に広がった。

日本の「朝鮮総督府」は徹底的に民衆を弾圧した。ソウルから南に列車で1時間以上離れた堤岩里（チエアマリ）という村では、日本の軍隊と警察から、「15歳以上の男子は全員村の教会に集まれ」と命令された。そして教会の入り口と窓を釘付けされ、中に向けて銃を乱射し、火を放つて、全員虐殺された。これが「チエアマリ事件」である。

この事件を素材にして李盤（イバン）という高戸さんの友人劇作家が、芝居を書き、それを日本語に訳して、まず、2000年の秋、日本の神田にある韓国YMCAで、上演し、その日本語のままで、日本の劇団が、韓国へ行き、韓国国立劇場、その他の場所で、計11回上演したのである。

わたしたち4人は、神田の韓国YMCAで2000年11月27日、この『銃剣とチョヨンの舞』を見、さらに韓国まで後を追うことになったのである。

わたしたちは緊張しながら600人の韓国の方々とこの惨劇の芝居を見た。わたしはこの劇の複雑な動きを理解できなかったが、2度目の日本語を聞かせていただいたのでかなり分かった。

幕が下りてからの長い長い全くの沈黙は息が詰まるようであった。

そうして1分か2分無音の後、最初は遠慮がちにパラパラと、そのパラパラさ加減が少しずつ増し、やがて拍手となり、その拍手は劇場全体に鳴り響いた。

わたしはこの芝居を観ているとき(21ページへ続く)

# 漢文のペリシ

『論語』にみる  
孔子の弟子達

子貢



姓：端木  
名：賜  
字：子貢

往おうを告つげて來らいを知る者なり

子貢曰ク、詩ニ云フ、如ク切ク、如レ磋スルガ、

如ク琢スルガ、如レ磨スルガ、其レ斯ノ之ヲ謂フ與。

子曰ク、賜ヤ也、始メテ可キ與ニ言フ詩ヲ

已レ矣。告ゲテ諸ニ往ヨ而ル知ル來者。  
(学而第一)

女なんじは器きなり

子貢問ヒテ曰ク、賜ヤ也、何ノ如ク。

子曰ク、女ハ器ナリ也。曰ク、何ノ器ゾヤ也。

曰ク、瑚ナリ璉ナリ也。  
(公治長第五)

※訓点と読み下し文は、諸橋轍次『論語の講義』大修館書店による。

子貢曰く、詩に云う、切せつするが如ごとく、磋さするが如ごとく、琢たくするが如ごとく、磨まするが如ごとく、其これれ斯しいの謂いか。子曰く、賜これや、始はじめて與ともに詩を言う可べきのみ。諸これに往こを告つげて來らいを知る者なり。

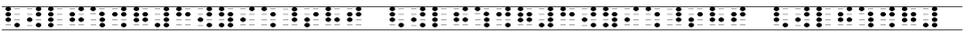
(貧しくてもへつらわず、富んでも驕おごらない人物はどうでしょうと孔子にたずねると、なかなかの者ではあるが、貧しくとも道を樂たのしみ、富んで礼を好む者には及せばない。)

これを聞き、詩經にある「切せつ磋たく磨ま」の言葉をひいて、す早く理解をしめす子貢に、孔子はそれでこそ共に詩經を語り合えるものよと喜び、過去のことを話せば将来の事を推知する者だと、子貢を賞賛する。

子貢問いて曰く、賜いや何いか。子曰く、女なんじは器きなり。曰く、何いの器きぞや。

曰く、瑚こ璉れんなり。

自身の人物評を求める子貢に対して、孔子は「なんじは器なり」という。どんな器かと重ねて問うと、「瑚璉」(これん・祭祀に用いる立派な器)であると答えた。器は用途が限られたものとして「君子は器ならず」(為政第二)の孔子の言葉がある。



子貢 曰 ク、 詩 ニ 云 フ、 如 ク  
 切 スル ガ 如 ク 磴 スル ガ、 如 ク  
 琢 スル ガ 如 シトハ 磨 スル ガ、 其  
 レ ス 之 謂 カ 與 。 子 曰 ク、 賜 ヤ  
 也、 始 メテ 可 キノミ 與 ニ 言 フ  
 詩 ヲ 已 矣 。 告 ゲテ 諸 ニ 往  
 ヲ 而 知 ル 來 ヲ 者 ナリ 。



前520～前446年。孔子より31歳若い。  
 才気煥発で雄弁な子貢は、商才にもたけ、  
 巨大な富を築いた。時に顔回と比べられる。

子曰く、回や其れ庶いかな。屢空し。  
そ ちか しばしばむな  
 賜は命を受けずして貨殖す。

子貢 (端木 賜)  
たんぼく し

かしよく  
 億れば則ち屢中る。(先進第十一)  
おもんばか しばしばあた

「回(顔淵)はまあ〔理想に〕近いね。〔道を楽しんで富みを求めないから〕よく窮乏する。賜(子貢)は官命をうけなくとも\*〔自分で〕金もうけをして、予想したことはよく当たる。」

\* 官命を… — 俞樾の説。「天命に安んじないで、とみるのがふつつ。  
ゆえつ  
 (金谷治 訳注『論語』岩波文庫より)

「顔回は殆ど道に到達せんとするに近い。彼はしばしば経済的な窮乏に陥ったが、それでもなお楽しむところを改めず、分に安んじている。……賜(子貢の名)は、天命を受けずして、なお自己の財産をふやすことに努めている。……しかしこの賜も、深く思慮をめぐらして物事を考えると、大体、道に中るだけの事は出来る人物である」  
あた

(諸橋轍次『論語の講義』大修館書店より)



## 「報告と」案内

### 一 『萬葉集釋注』第八巻



横浜漢点字羽化の会で、伊藤博著『萬葉集釋注』

(集英社文庫)の製作が始まって久しくなります。今年度横浜中央図書館に納入しますのは、第七巻(巻第十三・巻第十四)を予定しております。現在ファイルの最終的な編集の作業に入っております。その編集が終わりますと、その規模が明らかになります。

本会会員の主な作業は校正です。校正は極めて地味な作業ですが、出来上がった書物の良否に関わる作業です。現在は第八巻の校正作業に取りかかっております。二校・三校を、東京の会員にもお手伝いいただいております。楽しみです。

### 二 『岩波古語辞典』

東京では『岩波古語辞典』の漢点字訳に取り組んでおります。こちらもゴールが微かに望める地点に達し

ております。これは、視覚障害者に電子データとして提供する形を考えております。ご希望の方は、ご一報下さい。

横浜も東京も、現在の取り組みに続く活動を模索する時期になりました。どういう方向を目指すか、お見守り下さい。

### 三 日本漢点字協会

昨年四月五日、会長をお勤め下さっていた川上泰一先生の奥様・川上リツエ様がお亡くなりになって、協会は事実上、活動の休止状態になりました。その後ほとんど情報はなく、理事の先生方がどのようにお考えなのか、全く知られないままに時が過ぎております。

元会員の一人として、このような状態を大変残念に思わずにはおられません。早々に方向性をお示しいただけることを願って止みません。

## 編集後記

▼岡田さんの文章を読むと、日本語そのものが、漢字とカナで成り立っているという事実がひしひしと心に刻まれてきます。もし、日本語が音標文字で表現されるものだったら、日本語は今とは全く違う言語になっていたはずということがよく理解できます。遙か昔、この国に文字が大陸から伝えられて以来、日本語は漢字とカナで表現される言語として発達してきたのです。今更カナ文字やローマ字という音標文字で日本語を表現することはできないものになってしまいました▼私の父は若い時、ローマ字運動に興味を持っていたようで、家の本棚にローマ字で書かれた「力学」の教科書がありました。残念なことに現物は既になくなってしまいました。残念なこと、相当厚い、立派な書籍でした。そのローマ字で書かれた内容が、本当にちゃんと理解できるものかどうか、確かめてみたい気がします▼日本語をカナ文字やローマ字で表現することがいかに困難なことであるかが理解されて、結局これらの運動が消えてしまった原因が、容易に理解できるのです。

(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: [www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。